令和7年度

事務所だより　第3号

令和８年３月６日
益田教育事務所

清新活発

調整監　　大庭　泰二

令和７年度が始まり、ひと月余り経ったころだったでしょうか。益田市内のショッピングモールの入り口で、ある２０代の先生とすれ違いました。その先生は明るく元気に挨拶をしてくださいました。手にはおいしそうなアイスクリームを持っています。

「いいなぁ、アイスクリーム…。なんか、うれしそうだね。」と声をかけると「はい！〇〇小学校で同年代の先生方と教材研究をしていました。終わったのでアイスクリームを買って帰ります！」と颯爽と駐車場に向かうその後ろ姿を、春の休日のさわやかさも相まって今でも鮮明に覚えています。

令和７年１０月に島根県教育庁学校企画課が示した「市町村立教職員人事異動方針細則について（対象：教育職員・事務職員）」。すべての教職員の皆さんがご覧になったことだと思います。その中の最初のページで人事異動方針の概要を以下のようにお伝えしています。

人事異動方針の概要

◆学校の教育活動の活性化

学校の活動を一層清新活発にし、本県の教育の進展に資するため、全県的視野に立ち、適材を適所に配置し、教職員の組織が適正なものとなるように行われています。

◆県内全域の児童生徒に対して等しく教育を保障

本件は東西に長く、中山間地、離島を有しています。出雲・石見・隠岐の地域間、平野部と山間部、島しょ部間において、教員の偏在が顕著です。県内全域の児童生徒に対して等しく教育を保障するため、全県的な視野に立って人事異動を行う必要があります。

◆教職員自身のキャリアアップ

人事異動により、地域や規模の異なる学校で勤務することは、教職員自身のキャリアアップにもつながります。

学校の活動を一層清新活発にすること、児童生徒に対して等しく教育を保障すること、教職員自身のキャリアアップを図ること・・・。なぜ、自分はこの学校に、この職場にいるのか。なぜ、自分はこの役割を与えられているのか。なぜ、自分は苦しみもがきながら、それでも目の前にいる「子どもたちの“今”を支える」ために仲間と日々研鑽を重ねているのか。そんなことを改めて考えることのできるメッセージの一つだと、私はそう受け取りました。

教職員不足はとても深刻な課題です。多くの方からご相談を受けるのですが、私の力不足でその課題を解決するためのお手伝いが十分にはできていません。本当に申し訳ありません。そんな中でも、「お互い大変だけど、乗り越えていこうや」などと前向きな声を多くいただきます。この春出会った先生のように、まさに「清新活発」に。

すべての教職員の皆さんが、それぞれの持ち場、立場で、さわやかに生き生きと力強く、未来に向けて歩んでいくこと。私もそのお手伝いのひとつでもできるよう、さわやかに過ごしていきたいと思います。

ふるさと教育オリジナルキャラクター
「ドジョッち」「オロッち」

□□□ 社会教育特集 ■■■
益田管内版「ふるさと教育」 ～ふるさと教育で高まったものは？～

社会教育スタッフ企画幹　佐々木　将光

平成17年度(2005年度)から始まった**ふるさと教育**も、令和7年度(2025年度)で21年目となりました。この間、島根県では3年ごとに重点項目を決めて取り組んでおり、令和8年度から第8期(令和8年度～令和10年度)に入ります。第8期は、第7期までの方向性を踏襲しつつ、探究的な学びに資する力として、学んだことや経験を生活の中で生かし、繰り返し体験しながら改善し続ける力、すなわち「実践力」の育成を目指すことをテーマに掲げています。

これまでも益田管内では、ふるさと教育をキャリア教育と関連付けるとともに、学校内の学びに留めず、各市町の施策と結び付け、一体的に推進する中で、「実践力」の育成に取り組んできました。

益 田 市 ：「ライフキャリア教育」
津和野町 ：「0歳児からのひとづくり事業(学びの協働推進事業)」
吉 賀 町 ：「サクラマスプロジェクト」

ふるさと教育が教育委員会の中心施策として位置付けられ、市町の地域振興部局、福祉部局等、他のセクションと連携を図りながら「ひとづくり・まちづくり」の視点が色濃く取り入れられています。

こうした、「ひとづくり・まちづくり」の視点を取り入れ、益田・津和野・吉賀、それぞれの特色を生かしたふるさと教育（ 益田管内版「ふるさと教育」といったところでしょうか ）によってどのような変容が見られたのでしょうか。下表に示したものは、全国学力・学習状況調査【生徒質問調査】の結果の一部です。

【質問調査：中3】 設問27:地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。(肯定的回答率)

	R3	R4	R5	R6	R7
島根県	47.3%	42.3%	64.6%	78.2%	75.2%
益田管内	45.6%	37.1%	63.8%	78.8%	81.5%

UP!

※令和4年度までは「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」という設問

中学3年生の「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という設問に対して肯定的回答が高まっています。また、県平均と比較しても、益田管内の数値が高いことがわかります。この「地域や社会をよくするために何かしてみたい」というポジティブで能動的な姿勢は、島根のふるさと教育で目指す姿の「貢献意欲」にあたるものだと考えています。

益田管内では、なぜ、このように中学生の貢献意欲の高まりが見られるのでしょうか。そこにはどのような仕掛けがあったのでしょうか。

益田・津和野・吉賀、それぞれの特色あるふるさと教育の取組事例から紐解いてみたいと思います。

令和7年度　社会教育行政の方針と事業より
第7期ふるさと教育体系図（島根県教育庁
社会教育課）※一部加筆

修学旅行先での販売活動に向けた取組　（津和野町立日原中学校）

～特産物を通した『実物に触れる機会』･『実行できる場』づくり～

津和野町教育委員会　派遣社会教育主事　水上 真悟

日原中学校の２年生はふるさとの魅力を再確認することをねらいとして、修学旅行で、津和野町の特産物を販売する学習をしています。その中でふるさとへの愛着を深め、ふるさとに誇りをもち、ふるさとへの「貢献意欲」が高まる以下のような仕掛けをしています。

～特産物から『まち』を知る～

特産物が製造されている現場を訪問し、どんな所でどんな人が作っているのかということに直接触れ、地図や資料では感じられない環境や雰囲気を感じる。

事業所を訪問し“ひと”から感じる

～特産物から『ひと』を知る～

訪問した事業所の方に来校してもらい、対話しながら販売する商品を考えたり、商品をPRするためのチラシを制作したりすることで、事業者の商品に対する想いや人柄を感じる。

対話で触れる想いと人柄

～実行の場～

客層を意識した特産物選びや商品の魅せ方など、学習してきたことを実践するために、修学旅行先の東京（津和野町東京事務所前のスペース）で生徒自身が販売をし、実際にお客さんの反応に触れることでの達成感を得る。

販売活動で“リアル”を体感する

～多様な人からの価値付けの場～

学習の成果をまとめ、文化祭で家族や地域の方に発表した後、島根県立大学を訪問し、大学生に対しても成果の発表とふるさとの魅力のPRを行った。家族や地域の方などの身近な存在からの価値付けに加え、他地域で生活している大学生との対話を通し、自分たちの活動がどのように地域に貢献しているのかということを客観的に評価し、価値付けをしてもらうことで自信をもってふるさとを語れる自己有用感を育む。

【まちを知る】【ひとを知る】ことで地域の教育資源が『どこかの』『誰かの』ではなく『あそこの』『あの人の』となり、生徒は親近感を抱いていきます。また、学んできたことを実際に体感してやりきるといった【実行できる】機会によって達成感を味わい、さらには、【多様な人から価値付けをしてもらう】ことで自己有用感を高めていきました。

日原中学校の取組には、このような仕掛けが教育課程にしっかりと組み込まれています。そういった仕掛けの積み重ねにより、生徒の「貢献意欲」が高まっていったと考えられます。

２年生担任：山根耀平先生より

地域の方と対話し、一緒にふるさとのPR方法なども考えました。

活動を進めていく中でふるさとの特産物への愛着がわき、それをどのように商品PRとして表現するか熱心に考える姿が見られました。

販売活動当日、生徒たちは積極的に通行人に声をかけ、商品のPRや呼び込みをしていました。即時完売する商品もあり、その時の驚きとともにうれしそうな生徒の表情が印象的でした。

地域との協働で実現する『プロジェクト型学習』の取組
～「貢献意欲」を生み出し高めるものとは～ （吉賀町立六日市中学校）

吉賀町教育委員会　派遣社会教育主事　坂田　哲郎

児童・生徒と地域との関わりの中で、「貢献意欲」はどのように育まれるのでしょうか。六日市中学校の『6マチプロジェクト』では、このことのヒントが見られました。本プロジェクトでは地域を学びのフィールドに、人との「関わり」を学びの核として、生徒が現代や未来の社会（マチ）の中で自分の力を発揮して生きる力を養うことを目指しています。

このプロジェクトのメインの活動は、地域の大きな祭り「きん祭みん祭農業文化祭」に六中の生徒が企画・運営側として参画し、生徒それぞれの「やりたい」を実現させる取組「きんみんチャレンジ」です。この活動のポイントは、「地域の人と必ず協働すること」「その人は自分で探して決めること」です。

まず生徒は「やりたい」を明確にするため、自分自身を見つめ直す必要がありました。その手助けになったのが、他者との対話です。多様な地域の人々と対話をする機会を数多く設定することで、地域と課題感や熱意などの共感が積み上げられ、生徒の「やりたい」を生み出しました。さらに対話は、自分の「やりたい」の実現につながるパートナーにもつなげてくれました。地域との関わりが、生徒の「やりたい」を引き出し、実現への道筋をつけていったのです。

思いを共有し合う対話の場

この一連の取組について、学校は以下のようにとらえています。

これまでは、学校が与える活動が多かったのではと思い、生徒が自分の「やりたい」に自分で踏み出し、試行錯誤する経験を積んでほしいと考えました。個々の「やりたい」を追究する難しさは、地域との協働が解決してくれました。学校は生徒の「やりたい」の背中を押すことを心がけました。「自分のやりたいこと」を出発点とした活動でしたが、地域とかかわりながらやり遂げる中で、「地域のために」という思いが生まれる生徒が多く出てきたことに驚きました。　吾郷　翼 先生より

実際に、このプロジェクトを経験した生徒から以下のよう声が聞かれました。

大変なこともあったけど、6 マチがあってよかったです。…次にやりたいことがもう見つかっているから、次も大人と交流してこの町をもっといい町にしたい。

さらに、生徒と関わった地域の大人にも、気づきや学びが生まれました。

地域の大人としての関わりや伴走の仕方、子どもの気づきや成長を促せるように関わる方法などを今一度考え、準備したい。

こうした相互の「貢献意欲」は学校を核とした地域づくりの大切な要素となります。自分の中から湧き出た「やりたい」を、多くの人との協働により実現できた経験、それが町や地域をよくすることにつながる実感を得た経験が、「私もこの町の一員として何かできる」という思いを生み出したのではないでしょうか。冒頭の問いに対する答えの１つとして、「貢献意欲」はこうした経験の上に表れてくるのではないかと考えられます。

このような「貢献意欲」って、中学生になっていきなり高まっていくものかしら？
小学校段階での活動が関係しているのかな？

小学校段階での発達段階に応じた学びの積み重ねが中学生の「貢献意欲」の土台となっているんだよ。

益田市の小学校の取組事例を見てみよう。

『対話を通して触れる、地域・大人の思い』
～豊かな対話で育む地域への愛着～ （益田市立戸田小学校）

益田市教育委員会　派遣社会教育主事　石川　英樹

益田市立戸田小学校では、様々な学習活動において対話を重視し、対話を通して多様な考え方や価値観に触れることを大切にしています。第3・4学年の総合的な学習の時間「ふるさと大好き・ひとまろの里のこれまでこれから～ひとの思いや願いにふれる～（ひとまろの里探検×対話）」の単元においても、25年に一度の神社の例大祭に際し、「これまでずっと続けてきた例大祭を絶やさずに継承していきたい。」「例大祭を通して地域を盛り上げたい。」という地域の大人の思いに対話を通して触れていく活動を意図的に設定しました。

対話を豊かにするためには、指導計画や学習環境の整備が必要です。豊かな対話を通して地域への愛着が芽生え、その愛着によって築かれた関係性からまた豊かな対話が生まれていきます。
今回の戸田小学校第3・4学年の総合的な学習の時間の取組からそのポイントを整理してみました。

【豊かな対話を生み出すポイント】▸▸▸

★ワクワクする「ひと・もの・こと」との出合い

・神輿を運びたいな…と困っている地域の人との偶然（を装った）の出会い。まち探検の途中でしたが、「何やってるのかな？行ってみよう！」と行先変更（実際にはウラの計画どおり）など、子どもたちの、もっと知りたい、やってみたいという興味・関心、意欲や好奇心を引き出す学習活動を設計。

あれ!?神輿の修繕をしている人がいる。
どうやら神輿を直して神社に運ばないといけないらしい…

★対話を通した地域の「本物」との出合い

・祭りの準備をしているその場で対話をしたり、関わったりすることで、準備の大切さや祭りに込められた思い、歴史などについて、ゲストとしてではない、日常の営みの中にあるよりリアルな「本物」の思いに触れる。

予定変更！それなら
ぼくたちが運んであげます！
わっしょい　わっしょい

★「やらされ感」ではなく「自分たちでやった感」

・神輿を担ぐ、準備を手伝うなど、見学だけではなく、当事者として関わったことで、自分が地域の一員である実感を得た。また、神輿の担ぎ手不足という現実に触れ、地域が抱える課題を「自分ごと」として捉えるきっかけとなった。

・例大祭当日に多くの子どもたちが参加し、みんなで神輿を担ぐ。教員は参加することへの価値づけをし、送り出す。祭り会場で実際に感じたリアルな感想を学習発表会で地域に届ける。学校と地域を学びで往還する。

あれ？神社にたくさんの地域の人が。
25年に一度の祭りのために準備しているみたい。話してみよう！

単元終了後、担任の先生に子どもたちの変容について伺ってみました。

地域の方やふるさと・ひとつなぎコーディネーターと連携し、子どもたちが実際に地域の人や伝統行事と関わる場面を意図的に設定しました。その結果、子どもたちは、対話や体験を通して、地域の歴史や伝統行事、地域課題について理解を深め、神輿を担いだりインタビューを行ったりするなど主体的な行動が見られました。また、学習や例大祭参加により、「地域に育ててもらっている」という実感が生まれ、「今度は自分たちが何かしたい」という意識の変化も見られています。

担任:南波敏広先生より

ライフキャリア教育において、小学校段階では、多様なひとと出会い、話を聴いたり質問をしたりするコミュニケーションの場を重視しています。顔が見え、安心できる関係性の中で、対話を通して思いに触れ合う経験を積み重ねることで地域への愛着が育まれていきます。そうして育まれた愛着の積み重ねが、多様なひととつながる土台となり、中学校段階での一歩踏み出した「誰かの、地域のために自分たちができること」を考えることが、「貢献意欲」へつながっていくのではないでしょうか。

益田、津和野、吉賀、それぞれの特色を生かした中学校、小学校におけるふるさと教育の取組事例を紹介しましたが、中学生にとって、地域貢献は、「自分を表現し、他者とつながるための手段」になりつつあるのかもしれません。教職員も含めた大人が子どもを「守られる・してあげる対象」ではなく、「地域を創るパートナー・ともに学びを創る主体者」として尊重している姿勢が、彼らの意欲を支えているのではないでしょうか。そして、その意欲は、小学校、さらには就学前の幼児期から、地域全体を学びのフィールドに、対話をとおした様々な「ひと・もの・こと」による多様な価値との出合いの積み重ねから生まれるふるさとへの愛着や誇りが土台となって育まれています。

このような中学生の「貢献意欲」の高まりは、その先にどのようにつながっているのでしょうか。下の表は島根県内の高校3年生を対象とした進路決定に関する意識等の把握に係る調査の結果です。

【高校生の「ふるさと教育」に対する意識】(肯定的回答率)

設問		2018 年度	2023 年度
1	小中学校での「ふるさと教育」により、学ぶ喜びや充実感を味わい、学習意欲の向上につながった。	82.0%	80.9%
2	「ふるさと教育」の中での地域の方との会話や接することで、コミュニケーション力や思いやりの気持ちが身に付いた。	83.0%	85.2%
3	「ふるさと教育」により、地域の自然、歴史、文化、伝統行事、産業等の知識が修得できた。	89.1%	87.0%
4	「ふるさと教育」が、自分の進路決定に影響している。	41.1%	UP! 56.1%
5	「ふるさと教育」が、自分の将来像を描くことに影響している。	45.6%	56.1%

進路決定に関する意識等の把握に係る調査(島根県内高校3年生対象:R5.12.11～R6.1.29) より

小学校、中学校におけるふるさと教育によって身に付けた資質・能力は、高等学校における探究的な学びの基盤となるだけでなく、進路決定や将来像など生徒自身の「生き方」に繋がっていることがわかります。

こうして育まれた「ふるさとへの愛着・誇り」「貢献意欲」は、令和8年度から始まる第8期のキーワードである「実践力」へと昇華されていきます。学んだことを生活の中で生かし、試行錯誤しながら改善し続ける力、実践力。それは、予測困難な時代を生き抜く子どもたちにとって強みとなるはずです。

私たち大人の役割は、彼らの意欲から生まれる「やってみたい」に対し、共に地域・学びを創るパートナーとして、教育課程や地域の活動に無理なく仕組みながら、その挑戦を面白がり、支え続けることではないでしょうか。子どもたちの「やってみたい」が益田管内の至る所で形になる未来を目指し、派遣社会教育主事を中心に「益田管内版ふるさと教育」を推進していきます。